

## 大学生が患者の視点で捉えた看護師の化粧に対する評価

荻あや子\* 玉谷奈都美\*\* 岡山加奈\*

**要旨** 本研究は大学生が入院患者であると想定し、看護師のどのような化粧が、患者に好印象を与えるのかを明らかにすることを目的に、A大学3学科の学生126名に質問紙調査を実施した。その結果、濃い・派手な化粧の印象は「話しかけにくい・近づきにくい」「怖い」が多く、薄い・地味な化粧の印象は「話しかけやすい・近づきやすい」「清潔」が多かった。看護師の化粧A(薄)～E(濃)の評価では、化粧Bが最も高く、化粧A、C、D、Eの順に低くなった。5項目の平均評価得点は化粧A～Cまでが3点以上であった。項目ごとでは、化粧Aは真面目さの評価が高く、化粧C、Dでは明るさの評価が高かった。看護師の化粧では、化粧Aのファンデーションと眉ずみに化粧Bのチークと口紅を加え、顔色を健康的で明るい印象にすることで患者に好印象を与え、評価が高まることが示唆された。

**キーワード**：看護師の化粧、評価、大学生、印象、患者の視点

### I 緒言

看護師の印象は外見のみでなく、言葉遣いや態度が占める割合も大きい。しかし、今日、在院日数が減少し、日々受け持ち看護師が変わり、一人ひとりの患者に看護師が関わる時間も少ない傾向にあることから看護師の外見が患者に与える印象は大きいと思われる。一般に、大人の女性にとって適度な化粧はマナーであると言われるが、医療現場では安全性や清潔などが優先されることや対象が病気をもった患者であることから、特に薄化粧で、なかにはノーメイクに見える看護師もいたり、派手な化粧をしている看護師もいたり、それぞれの価値観で看護を実践している。看護師は人に接する仕事をしているが、実際に患者は看護師の化粧をどのように感じているのか、またどのような化粧が好印象を与えるのかについて疑問が生じた。

松本<sup>1)</sup>によると、「看護師は自分自身の化粧行動への認識を、看護師自身において意欲を高め、かつ社会的意味をもつ」と述べている。井上<sup>2)</sup>らの研究では、「患者・看護師の接遇に対する意識は患者のほうが高く、その中でも特に、身だしなみ・言葉遣いに対して患者が重要視している」ということが明らかになっている。また、同調査で「看護師は薄

化粧を心掛けているが、身だしなみにおいて患者・看護師間の意識に違いがあった項目は『化粧』であり、職業上、好ましい程度の化粧を心がけることが大切である」と、化粧に対する配慮を指摘している。さらに、山田ら<sup>3)</sup>によると、「病院内では、自己免疫機能の低下や、化学療法の副作用による脱毛や骨髄抑制を強いられている患者も多く、一般の反応より、医療従事者が思っている以上に、患者・家族は看護師の髪形について厳しい見方をしている」と、看護師に求めるイメージの第一位が清潔であることを報告している。これらの先行研究から、看護師にとって化粧は意欲を高め、かつ社会的意味をもつものである半面、患者と看護師の間では、化粧に関して意識に違いがあり、その理由としては、患者は入院・治療中であるために清潔感を求めていると考えられる。患者が受ける看護師の印象は、化粧のみでなく態度や言葉遣い、髪型による影響もまた大きいと先行研究<sup>4) 5) 6) 7) 8)</sup>で明らかになっているが、これらは身だしなみや接遇の研究の一部であり、具体的に看護師の化粧が与える印象や、どのような化粧が患者に具体的によい印象を与えるかを明らかにした研究は見当たらなかった。本研究によって、患者により安心感のある看護を提供したり、看

\*岡山県立大学保健福祉学部看護学科  
\*\*倉敷中央病院

〒719-1197 岡山県総社市窪木111  
〒710-8602 岡山県倉敷市美和1-1-1

看護師の第一印象がよくなることで円滑な信頼関係形成の一助にできると考えられる。

## II 研究目的

学生が入院患者であると想定し、看護師のどのような化粧が、患者に好印象を与えるかを明らかにする。

## III 研究方法

### 1. 調査対象

A 大学看護学科4年次生と、デザイン工学科1年次生、スポーツシステム工学科1年次生の126名である。

### 2. 調査期間

平成22年10月1日～10月12日

### 3. 調査方法と調査内容

調査を実施するにあたり、授業終了後、学生に文書と口頭で研究の趣旨や調査記入に関する注意事項などの説明を行った。その後、調査を実施し、調査票を回収した。直ちに回答することが困難な学生には、当日18時までには回収箱に投函するよう説明した。

調査票は、先行研究<sup>9) 10)</sup>を参考に独自に作成し、基本項目Ⅰと化粧に関する項目Ⅱ～Ⅳで構成した。基本項目Ⅰは、学科、性別、入院経験の有無、内容(手術や痛みの伴う検査・処置の有無、入院の理由)、入院期間、精神的苦痛の6項目とし、選択と記述で回答を求めた。化粧に関する項目はⅡ～Ⅳに分け、項目Ⅱでは、看護師は社会人としてまた身だしなみとして、化粧をしたほうが良いと思うかを、①した方が良い、②ノーメイクがよい、③どちらでもよいの3段階で選択し、その理由を記述で求めた。項目Ⅲでは、学生にとって「濃い・派手」または「薄い・地味」と感じる看護師の化粧に対してどのような印象をもつかを14の選択肢から複数回答した。選択肢のうち①清潔、③安心・信頼できる、⑤健康そうだ・元気が出る、⑧やさしそう、⑨話しかけやすい・近づきやすい、⑩自分のことを真剣に考えている・大切に思っているを肯定的印象とし、②不潔、④安心・信頼できない、⑥不健康そうだ・元気が出ない、⑦怖い、⑩話しかけにくい・近づきにくい、⑫自分のことを真剣に考えていない・大切に

に思っていないを否定的印象とした。項目Ⅳでは、写真A～Eを示し、学生は自分が入院患者であると想定し、清潔感・優しさ・明るさ・信頼性・真面目さの5項目について、全く感じない1点、どちらかといえば感じない2点、どちらかといえば感じる3点、すごく感じる4点の4段階で評価した。写真の顔は化粧A～Eに向かい順に濃くなっており、化粧Aはファンデーションと眉ずみのみ、化粧Bは化粧Aにチークと口紅を加え、化粧Cは化粧Bにアイラインとマスカラを加え、化粧Dは化粧Cにアイシャドウを追加、化粧Eは化粧Dの色味とまつげの量を増やしたものである。尚、これら使用している化粧品の種類については、アンケート用紙に記載している。本研究の髪型は、山田ら<sup>11)</sup>の研究から得られた好感のもてる看護師の髪型である。その内容は、「他者から見て目がはっきりと見えるようにする」、「顔の輪郭を覆わないように耳を出す」、「肩につかないように毛先をまとめる」、「長い髪はアップスタイルにする」という4条件を満たす髪型に統一した。今回は、後頭部の下方でネットを用いてまとめ、前髪はヘアピンで斜めに固定した。

### 4. 分析方法

統計ソフトはExcel 2007を用い、調査票の回答から平均値と標準偏差を求めた。また対象者を看護学科と他学科、入院経験の有無、手術の有無、痛みを伴う検査や処置の有無、入院期間、入院中の不安・精神的苦痛の大きさで分けた場合の平均値と標準偏差を求め、t検定を用い有意水準5%で有意差を求めた。入院期間においては、①日帰り入院、②2～3日、③4～6日を「1週間未満群」とし、④1週間以上2週間未満、⑤2週間以上1ヶ月未満、⑥1ヶ月以上3ヶ月未満、⑦3ヶ月以上を「1週間以上群」とした。また入院中の不安・精神的苦痛においては、①不安や苦痛が非常に大きかった、②不安や苦痛がますます大きかったを「不安・苦痛が大きい群」とし、③不安や苦痛が少しあった、④不安や苦痛はなかったを「不安・苦痛が少ない群」とした。

また自由記述においては、記述内容をコード化し、内容が類似しているものでまとめサブカテゴリー化、さらに内容が類似しているものをまとめカテゴリー化を行った。

## 5. 倫理的配慮

基礎看護学講座における研究計画書の検討会で了解を得た後、各学部の学科長に研究の趣旨と具体的な調査内容について文書と口頭で説明し同意を得た。また調査を実施する時間に関係する授業の担当教員にも同様の説明を行い、同意を得て協力を依頼した。学生には研究の趣旨、調査は無記名で行い、個人が特定されないように十分に配慮することや、調査への協力は自由意思によるもので、調査への参加はいつでもやめることができ、そのことによって不利益を被らないことを伝えた。データは厳重に保管し、調査以外の目的で使用しないこと、調査票は結果をまとめ、研究発表後は直ちに破棄すること、調査について疑問や質問があれば速やかに対応すること、調査票は回収することによって調査の同意が得られたこととする旨を文書と口頭で説明した。

## IV 結果

### 1. 対象者の概要

調査票は126部配布し、119部（回収率94.4%）を回収した。有効回答率は100%であった。対象者は、看護学科の4年次生44名（37%）、デザイン工学科の1年次生41名（34.5%）、スポーツシステム工学科の1年次生34名（28.6%）で、性別は、男性57名（47.9%）と女性62名（52.1%）であった。各学科の男女構成は、看護学科は女性44名、デザイン工学科は男性27名と女性14名、スポーツシステム工学科は男性30名と女性4名であった。全体のうち、45名（37.8%）に入院経験があり、74名（62.2%）には入院経験がなかった。入院経験がある者のうち、手術経験のある者は25名（56.8%）、ない者は19名（43.2%）であり、痛み・苦痛を伴う検査や処置を経験した者は39名（86.7%）、経験していない者は6名（13.3%）であった。入院期間は日帰り入院が1名、2～3日が6名、4～6日が15名、1週間以上2週間未満が12名、2週間以上1ヶ月未満が7名、1ヶ月以上3ヶ月未満が1名、3ヶ月以上が2名であり共に約1年の入院であった。「1週間未満群」は22名、「1週間以上群」は22名であった。入院中の不安・精神的苦痛では、不安や苦痛がなかった者が7名、少しあった者が21名、まずまず大きかった者が12名、非常に大きかった者が5名で、「不安・苦痛が小さい群」は28名、「不安・苦痛が大きい群」17名であった。

## 2. 化粧に関する項目

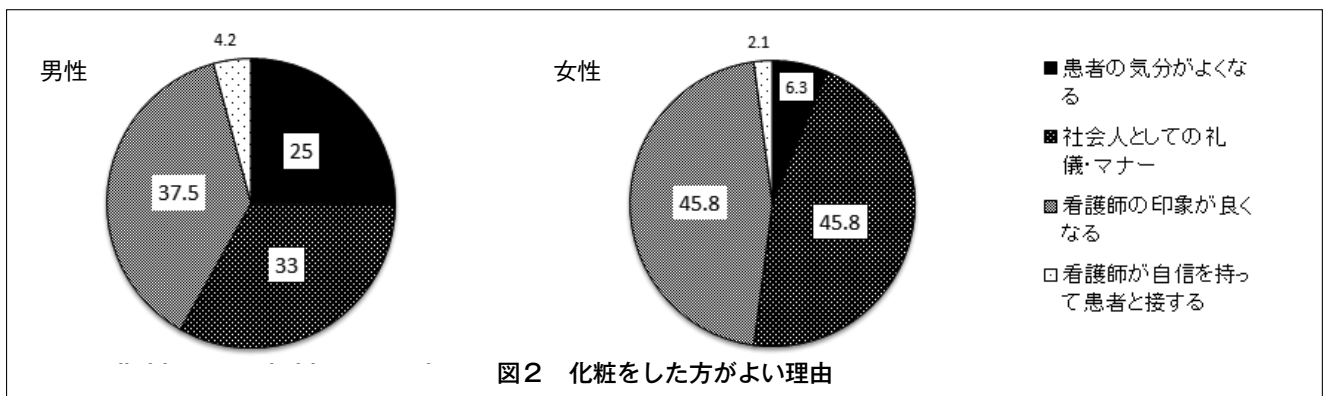
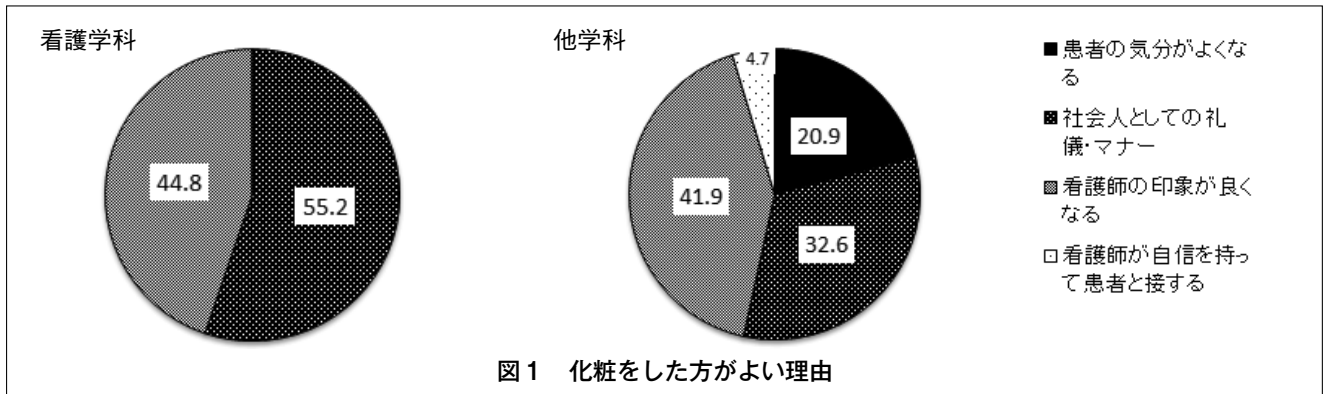
### 1) 看護師の化粧について

看護師は化粧をした方がよいと回答した者は70名（58.8%）、どちらでもよいと回答した者は49名（41.2%）、ノーメイクがよいと回答した者はいなかった。看護学科では61.4%がした方がよい、38.6%がどちらでもよいと回答し、他学科は57.3%がした方がよい、42.7%がどちらでもよいと回答していた。男女で比較すると、男性は45.6%がした方がよい、54.4%がどちらでもよい、女性では71%がした方がよい、29%がどちらでもよいと回答していた。また、女性のみで比較した場合、看護学科は61.4%がした方がよい、38.6%がどちらでもよいと回答しており、他学科では平均94.4%がした方がよい、5.6%がどちらでもよいと回答していた。

化粧をした方がよい理由を分析したところ、4カテゴリと9サブカテゴリが、どちらでもよい理由からは4カテゴリと11サブカテゴリが抽出された（表1）。以下カテゴリは【】、サブカテゴリは『』で示す。化粧をした方がよい理由には【患者の気分がよくなる】、【社会人としての礼儀・マナー】、【看護師の印象が良くなる】、【看護師が自信をもって患者と接する】の4カテゴリがあった。【患者の気分がよくなる】には、『患者の気分がよくなる』、『患者が癒される』が、【社会人としての礼儀・マナー】には、『身だしなみ』、『礼儀・マナー』が含まれた。【看護師の印象が良くなる】には『看護師の印象が良くなる』、『看護師が健康的に見える』、『看護師の容姿が美しく見える』、『看護師が清潔感を出す』が、【看護師が自信をもって患者と接する】には『看護師が自信をもって患者と接する』が含まれた。どちらでもよい理由には、【不快感を与えない外見であればよい】、【看護がきちんとできていればよい】、【状況や患者による】、【自由だ】の4カテゴリがあった。【不快感を与えない外見であればよい】には『身だしなみが整っていればよい』、『顔色が悪くなければよい』、『清潔感があればよい』、『不快な印象をあたえなければよい』、『元の顔や化粧の方法による』、『過度でなければ本人の自由だ』が含まれた。【看護がきちんとできていればよい】には『看護がきちんとできていればよい』が、【状況や患者による】には『状況による』と『患者による』が、【自由だ】には『自由だ』と『気にしない』が含まれた。

表 1 化粧をした方がよい理由とどちらでもよい理由

	カテゴリー	サブカテゴリー
した方がよい理由	患者の気分が良くなる	患者の気分がよくなる 患者が癒される
	社会人としての礼儀・マナー	身だしなみ 礼儀・マナー
	看護師の印象が良くなる	看護師の印象が良くなる 看護師が健康的に見える 看護師の容姿が美しく見える 看護師が清潔感を出す
	看護師が自信を持って患者と接する	看護師が自信を持って患者と接する
どちらでもよい理由	不快感を与えない外見であればよい	身だしなみが整っていればよい 顔色が悪くなければよい 清潔感があればよい 不快な印象をあたえなければよい 元の顔や化粧の方法による 過度でなければ、本人の自由だ
	看護がきちんとできていればよい	看護がきちんとできていればよい
	状況や患者による	状況による 患者による
	自由だ	自由だ 気にしない



化粧をした方がよい理由は、看護学科では「社会人としての礼儀・マナー」が55.2%と最も多く、次いで「看護師の印象が良くなる」が44.8%であった。これに対して他学科では「看護師の印象が良くなる」が41.9%と最も多く、次いで「社会人としての礼儀・マナー」が32.6%であった(図1)。また看護学科が化粧をした方がよいと回答した理由が「社会人としての礼儀・マナー」、「看護師の印象が良くなる」の2つであることに対し、他学科の回答からは「患者の気分が良くなる」、「看護師が自信を持って患者と接する」など複数の理由があげられていた。男女差で見ると(図2)、女性の多くが「社会人としての礼儀・マナー」や「看護師の印象が良くなる」ために化粧をした方がいいと回答していることに対して、男性では25%が「患者の気分がよくなる」と回答していた。どちらでもよい理由は、看護学科でも他学科でも約半数が「不快感を与えない外見であればよい」と回答していた。

2)「濃い・派手」「薄い・地味」と感じる化粧の印象

「濃い・派手」な化粧にもつ印象は、「話しかけに

くい・近づきにくい」が最も多く、次いで「怖い」、「安心・信頼できない」であり、約80%の者が否定的な印象をもっていた(図3)。

「薄い・地味」な化粧にもつ印象は、「話しかけやすい・近づきやすい」が最も多く、次いで「清潔」、「優しそう」が多く、約70%の者が肯定的な印象をもっていた(図4)。その他の内容として「濃い・派手」な化粧では、「物を頼みにくい」や「患者の悪口を言ってそう」、「学歴や育った環境が良くなさそう」で、「薄い・地味」な化粧では、「疲れていそう」、「身だしなみを気にしない人である」などであった。

3) 属性による化粧の評価の違い

化粧A～Eにおける平均評価得点では、化粧Bが最も評価が高く、次いで化粧A、C、D、Eの順に低くなった(図5)。項目別では真面目さにおいて、化粧Bより化粧Aの評価がやや高くなっていった。また化粧CやDでは、清潔感・優しさ・信頼感・真面目さと比較して、明るさの評価が高かった(図6)。

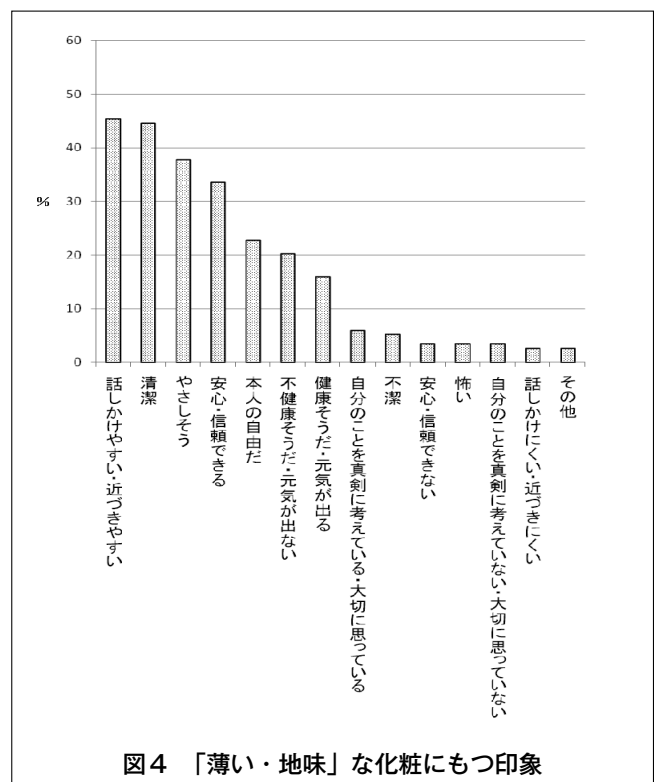
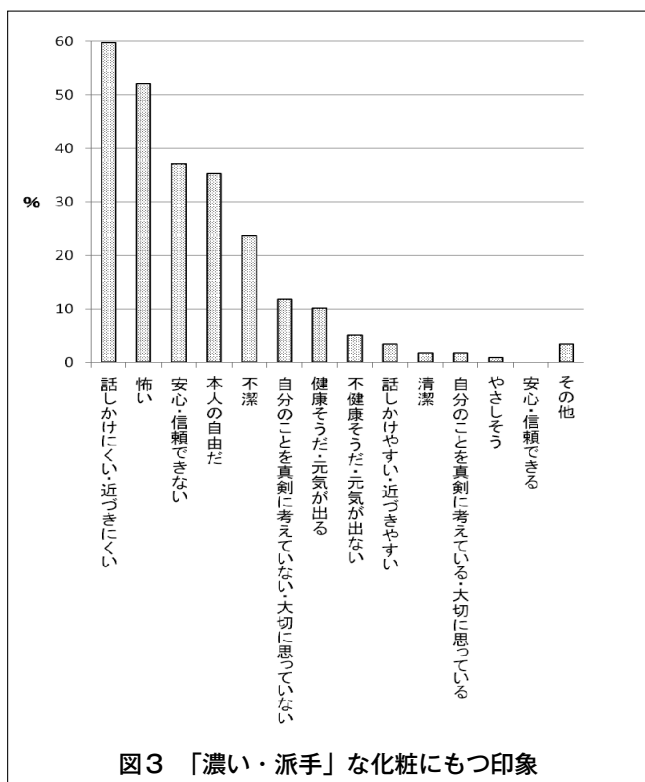


図3 「濃い・派手」な化粧にもつ印象

図4 「薄い・地味」な化粧にもつ印象

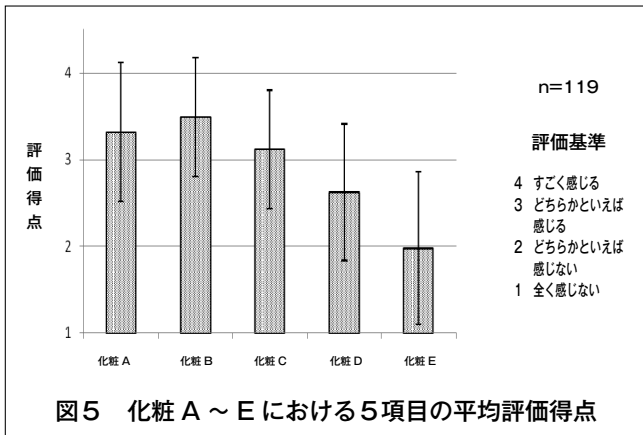


図5 化粧品A～Eにおける5項目の平均評価得点

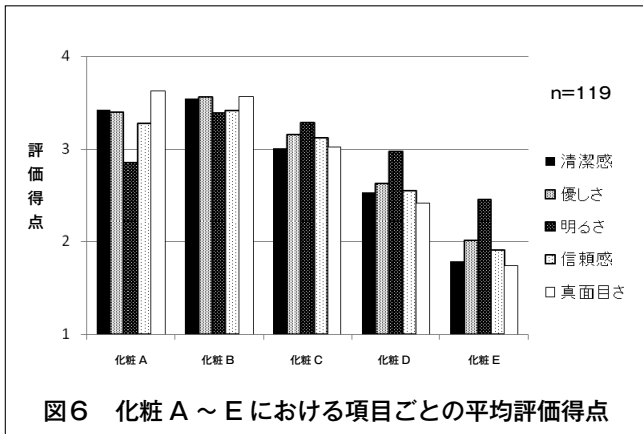


図6 化粧品A～Eにおける項目ごとの平均評価得点

看護学科と他学科の比較では、看護学科は他学科に比べ、化粧品A～Dにおいて評価が有意に高かった ( $p < 0.05$ )。化粧品Eにおいて有意差は認められなかった。また、化粧品A～Eすべてにおいて看護学科は他学科と比較し標準偏差が低かった (図7)。

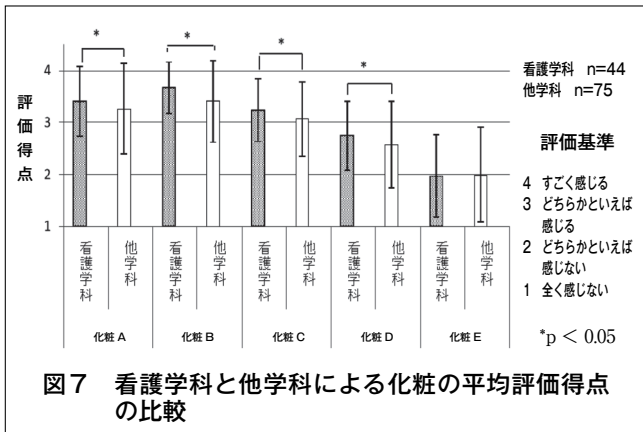


図7 看護学科と他学科による化粧品の平均評価得点の比較

男女差による比較では、女性は男性に比べ、化粧品B、Cにおいて評価が有意に高かった ( $p < 0.05$ )。化粧品A、D、Eにおいて有意差は認められなかった。また、男性は女性より標準偏差が高い傾向にあった (図8)。入院経験の有無による比較では、入院

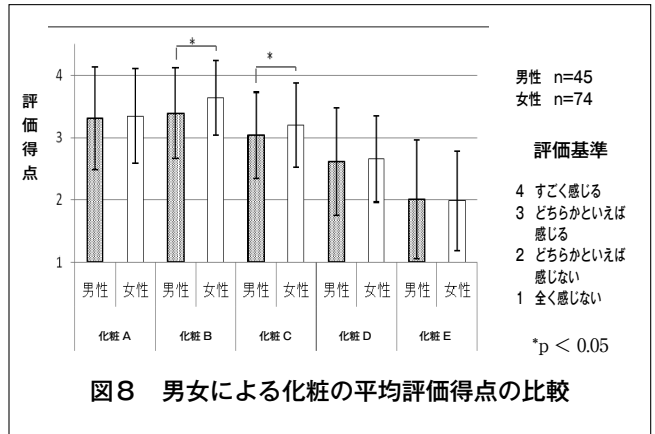


図8 男女による化粧品の平均評価得点の比較

経験あり群はなし群に比べ、化粧品A、Eにおいて評価が有意に高かった ( $p < 0.05$ )。化粧品B、C、Dにおいて有意差は認められなかった (図9)。入院期間

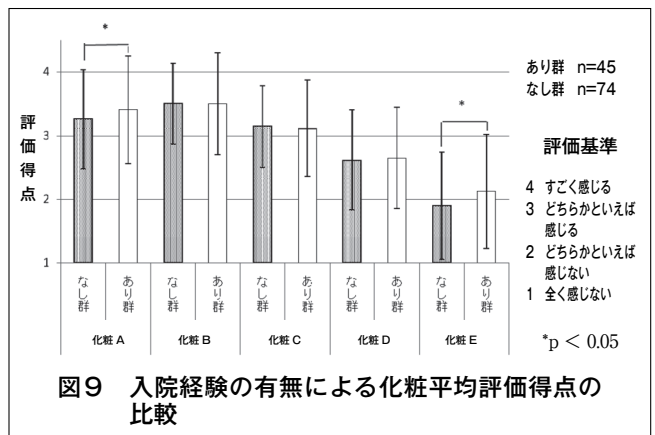


図9 入院経験の有無による化粧品平均評価得点の比較

の長さによる比較では、一週間以上群は一週間未満群に比べ、化粧品A、Bにおいて評価が有意に高かった ( $p < 0.05$ ) が、化粧品C、D、Eにおいて有意差は認められなかった。また、一週間以上群は一週間未満群より標準偏差が低い傾向にあった (図10)。入院中の不安・精神的苦痛の大きさによる比較では、不安・苦痛が大きい群は小さい群に比べ、化粧品D、Eで評価が有意に高かった ( $p < 0.05$ )。化粧品A、B、Cにおいて有意差は認められなかった。また不安・苦痛が大きい群は小さい群より標準偏差が高い傾向にあった (図11)。

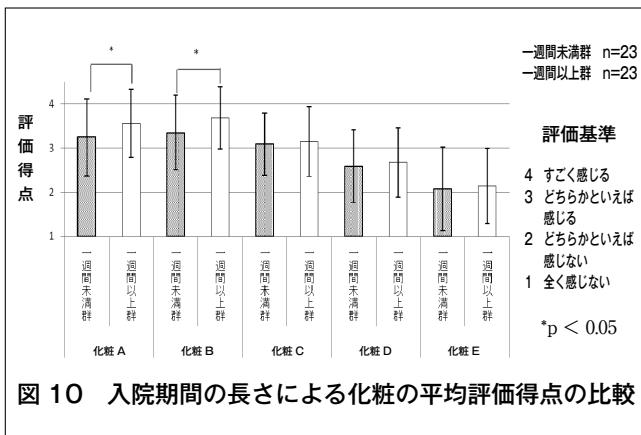


図 10 入院期間の長さによる化粧の平均評価得点の比較

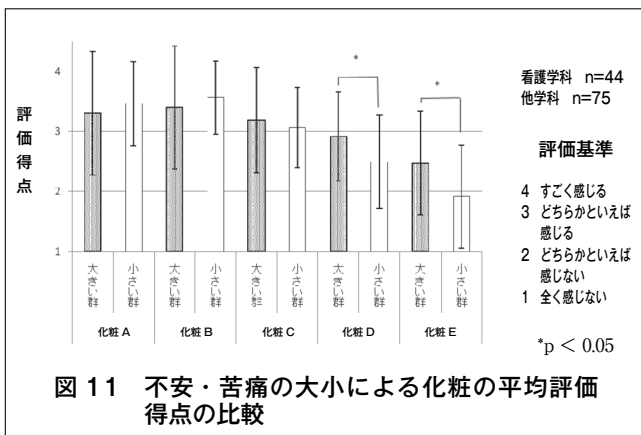


図 11 不安・苦痛の大小による化粧の平均評価得点の比較

## V 考察

### 1. 看護師が化粧をする意味

本研究で、看護師は化粧をした方がよいとその理由、適度ではなく「濃い・派手」や「薄い・地味」だと感じる化粧の印象を明らかにし、学科、性別、入院経験の有無、入院期間の長さ、不安・苦痛の大きさと化粧の評価の関連を考察する。

看護師の化粧は約6割がした方がよいと回答し、化粧をした方がよい理由の多くは『礼儀・マナー』や『看護師が健康的に見える』、『看護師が清潔感を出す』などである。また、どちらでもよい理由は『身だしなみが整っていればよい』、『顔色が悪くなければよい』、『清潔感があればよい』など化粧自体はどちらでもよいが身だしなみが整っていることが前提とされるものが約半数を占めていることが分かる。これらのことから、ノーメイクは身だしなみが整っていないという印象に繋がる可能性があり、化粧は看護師が身だしなみを整える手段の一つとして有効であると考えられる。

看護学科と他学科では、ほぼ同じ割合で、約6割が化粧をした方がよい、約4割がどちらでもよいと回答しているが、その理由に相違が見られる。看護学科では【社会人としての礼儀・マナー】、【看護師の印象が良くなる】の2つ柱で構成されているが、他学科の回答からは複数の理由があげられている。このことから、看護学科は社会的な礼儀・マナーとして化粧を捉えているが、他学科では看護師の化粧は社会的な意味だけではなく、患者の気分を良くすることや、患者を癒すものとして捉えていることが分かる。

看護学科と他学科の化粧の評価では、看護学科は他学科に比べ、化粧 A～D において評価が有意に高い。看護学科が化粧をした方がよいと考える理由をサブカテゴリーで見ると、『礼儀・マナー』に次いで『看護師が健康的に見える』である。つまり、看護学科は明るく健康的に見えることを重視しているために明るさの評価が高くなり、総合的に化粧の評価が他学科よりも高くなっていると推察される。明るさの評価は、比較的濃い化粧でも高いことや、また看護学科と他学科で比較すると、看護学科の方が化粧を高く評価し標準偏差が低いことから、看護学生同士は同じような価値観をもっており、他学科にとって評価の低い化粧でも、看護学科にとってはそれほど悪い印象を受けない可能性がある。また、今回は対象が大学生であるが、臨床では看護の対象は高齢者が多く、現場の看護師においても同様に看護師同士では濃く感じず好感のもてる化粧であっても、実際には患者の評価は低い可能性がある。他者の目を通して外見を客観的に評価し合い、それぞれの病棟の患者の特性に合わせて化粧を心がける必要があると考えられる。

男女で比較すると、男性は化粧をした方がよいと、どちらでもよいがほぼ同じ割合になっている。しかし、女性では化粧をした方がよいと回答した者がどちらでもよいと回答した者の2倍以上になっており、女性は男性よりも看護師は化粧をした方がよいと考えていることが分かる。男性と女性の化粧の評価では、化粧 B、C において女性の評価が有意に高くなっている。化粧 B はチークと口紅、化粧 C にはアイラインが引いてあり、男性よりも女性の方が濃い化粧に対して比較的评价が高いことが伺える。しかし、男女ともに最も評価が高い化粧は、化粧 B、次いで化粧 A であり、化粧をした方がよいと

考える者が多い女性も、化粧をした方がよいと考える者が少ない男性も、評価の高い化粧に違いはなく同じであることが分かる。またこの結果から、男性と女性は化粧の捉え方が異なっているように思われる。ファンデーションにより肌を整える程度でも化粧と捉えているか、アイシャドウやマスカラなど明らかに化粧気のあるものを化粧として捉えているかによって、評価の高い化粧は同じであったにもかかわらず、化粧をした方がよい、どちらでもよいの割合が異なったのではないかと推察される。また、女性の多くが【社会人としての礼儀・マナー】や【看護師の印象が良くなる】ために化粧をした方がよいと考えていることに対して、男性は25%が【患者の気分がよくなる】や、「男性は美しい女性のために頑張ろうと努力することがある」などもあり、看護師としてではなく女性として美しくあるように求められていることが分かる。男女差や看護学科と他学科の比較にも言えることであるが、看護学科は礼儀・マナーとして、化粧を社会的なものとして捉える傾向がある。石田<sup>12)</sup>によると「貴族の世界では化粧は礼儀作法に則った身だしなみという意味が第一義だった」や「化粧は成人の証としての意味を帯びる」とされ、化粧は成人女性の身だしなみとして位置付けられている。また「化粧の第一意義は大人の女性の礼儀であるという全国的な理解が完全に崩れ去ったのは、1990年代後半のこと」<sup>13)</sup>と述べているように、90年代という近年になって化粧をする意味が変化したことが分かる。それは「化粧の第一の意味が社会から個人に変化したことが、近年の化粧の意味の変化の根源をなすもの」<sup>14)</sup>と、個人化や価値観の多様化は化粧のあり方にも影響を齎していることが考えられる。今回看護学科は4年次生、他学科は1年次生に回答してもらったため、化粧が社会的意味をもつものか、個人のためにするものかという価値観に相違が見られたと考えられる。看護学科が化粧はどちらでもよいと考える理由に、本人の考えよりもTPOを優先すべきというものや化粧よりも大事なものがある、その人の表情のよさが活かされればよい、ちゃんと仕事をしていればどちらでも気にならないなどがある。これは、看護師の印象は化粧だけでなく、表情や言葉遣い、どのような看護をしているかなどにも関与していると考えられるために他学科よりもどちらでもよいの割合が多くなっていると推察される。反面、他学科の女性から

は「スツピンの自分の顔に自信がなければ、自信をもって人と接することもできない」という意見もあり、人と接するうえで化粧は看護師の内面にも影響を与えていると考えられる。

入院経験の有無による比較では、化粧をした方がよい理由やどちらでもよい理由において、入院経験なし群の回答にのみ『状況や患者による』があることや、入院経験あり群の中で化粧はどちらでもよい理由に、「しんどいときには気にならない」という内容があったことから、入院経験なし群は社会一般的に、あり群は自分の経験から考え化粧を評価したと言える。入院経験あり群が化粧Eで評価が高かったのは、苦痛が大きいときに看護師の化粧を気にする余裕がないという経験が影響しているのではないだろうか。入院中の不安・精神的苦痛の大きさによる比較では、不安・苦痛が大きい群は小さい群に比べ、化粧D、Eにおいて評価が有意に高い。これは入院経験あり群が濃い化粧に評価が高かったことと同様に、苦痛が大きかった経験に影響されていることが考えられる。

## 2. 好印象を与える看護師の化粧

「濃い・派手」な化粧には、約80%の人が否定的な印象を抱き、「薄い・地味」な化粧には約70%の人が肯定的な印象をもっていたことから、「薄い・地味」な化粧の方が好印象になることが分かる。医療現場では、在院日数の短縮などから一人ひとりの患者と看護師の関わる時間は減少する傾向にあると考え、「薄い・地味」な化粧による「話しかけやすい・近づきやすい」という印象は、何でも相談しやすく、信頼関係形成の第一歩となる重要な要素であると思われる。化粧A～Eの評価では、最も薄い化粧Aは、最も濃い化粧Eよりも評価が高くなり、清潔感、優しさ、信頼感、真面目さの項目で、薄い化粧の評価が高く、明るさの評価が低くなる傾向にあることが分かる。「薄い・地味」な化粧にもつ印象から、約2割の人が「不健康そう・元気が出ない」と回答しており、薄めの化粧は多くの場合に「話しかけやすい・近づきやすい」という印象をもたれるが、反面明るさに欠け、「不健康そう・元気が出ない」という印象を与えることもある。化粧Bは化粧Aに比べ明るさを改善し、全体的に最も評価の高い化粧になっている。化粧Bは、化粧Aにチークと口紅を加えたものであり、顔色が良くなっ



たことで好印象を齎したことが考えられる。ファンデーションと眉ずみのみの化粧 A と比べると、真面目さ以外全ての項目で評価が高く、顔色を明るくすることで清潔感や優しさ、信頼感に影響を及ぼしていることが推察される。化粧 C は、化粧 B にアイライン、マスカラと、アイメイクを加えたものである。アイメイクが加わることで、特に、清潔感や真面目さの評価が低くなっている。化粧 D は化粧 C にアイシャドウを加えたもので、化粧 E は化粧 D の化粧の色味を強くしたものである。目を囲うようにメイクをしており、特に、清潔感と真面目さの評価が低くなっている。アイメイクについては化粧 C までは清潔感、優しさ、明るさ、信頼感、真面目さのすべての項目で平均の評価が3（どちらかといえば感じる）以上になっており、アイメイクをする際はアイシャドウや目の周囲を囲むような化粧ではなく、自然なアイラインやマスカラが好ましいといえる。これらのことから看護師の化粧は、ファンデーションやチーク、口紅を用いて顔色を清潔で明るい印象にし、アイメイクをする場合は、真面目さや優しい印象を損なわない程度の自然なアイラインやマスカラがよいと考えられる。

### 3. 研究の限界と課題

本研究は、一大学の学生を対象に入院患者を想定して実施した調査であり、実際の患者を対象としていない。対象の年齢層が大学生に限られていることや、環境や身体的・精神的苦痛の有無も実際とは異なっているため、学生が患者の視点から回答することには限界がある。今後、研究対象を現場の看護師や、患者やその家族に広げ、年齢層や疾患、診療科別に調査を続けていく必要がある。また、看護師の化粧に対する印象では14項目から選択してもらったが、項目以外の印象も考えられるため、項目や回答形式を検討する余地がある。

不安・精神的苦痛が化粧の評価に影響していたが、具体的にどのような不安や苦痛によって化粧を気にする余裕がなくなったり、逆に非常に気になったりするかを明らかにすることでさまざまな状態の患者に対応できると考えられる。特に、小児科では親が付き添うことも多く、家族と看護師の信頼関係が重要である。患児の家族を対象に看護師の化粧を評価し患児の疾患や入院期間、心配の大きさなどの関連性を検討することで、看護師と家族の信頼関係

形成に看護師の化粧がどの程度影響しているのかなどを明らかにできると思われる。

## VI 結論

1. 「薄い・地味」な化粧は「濃い・派手」な化粧より、「話しかけやすい・近づきやすい」、「清潔」、「優しそう」などの好印象を与えることが分かった。
2. 化粧 A～E では、化粧 B の評価が最も高かった。化粧 C までが平均評価得点3以上であり、看護師の化粧は、ファンデーションやチーク、口紅を用いて顔色を清潔で明るく健康的な印象にし、アイメイクをする場合は自然なアイラインやマスカラが望ましい。
3. 看護学科と他学科との平均評価得点の比較では、看護学科の方が化粧の評価が高く標準偏差が低値であった。看護師同士では好感のもてる化粧でも、患者の評価は低く、気付かない可能性がある。
4. 男女の比較では、女性の方が濃い化粧を好み、看護学生は化粧を『礼儀・マナー』として捉える傾向にあるが、患者の気分を良くしたり、患者を癒す効果も期待されている。
5. 入院経験や不安・苦痛による化粧の評価も全体の評価と同様の傾向を示した。入院経験「あり群」や、不安・苦痛の「大きい群」の方が濃い化粧の評価が高くなった。

## 付記

本研究を進めるにあたり、快くご協力いただきました研究参加者の皆様に深く感謝いたします。

## 文献

- 1) 松本じゅん子 (2008). 入院患者の化粧行動に対する看護師の認識. 日本教育心理学会総会発表論文集第50回. 55.
- 2) 井上翠, 平野咲子, 福富美樹 (2007). 接遇に関する患者・看護師の意識調査. 大阪医科大学付属看護専門学校紀要. 13: 39-42.
- 3) 山田眞佐美, 米谷陽子, 久保恵子, 青木厚子, 佐藤眞一, 田久浩志 (2008). 好感の持てる看護師の髪型—病院職員と一般市民への質問紙調査より—. 第39回日本看護学会論文集看護総合. 233-235.

- 4) 古田晶子, 中村きよみ, 吉田智津子, 田邊沙耶香, 米山陽子, 高柳恵子 (2009). 患者から見た看護師の接遇に関する研究—患者の評価, 看護師の自己評価を受けて—. しょうけん: 浜松労災病院学術年報 2008 巻, 57-58.
- 5) 佐谷戸優子, 久保田香, 山岸晃子 (2003). 身だしなみに関する研究—看護師と患者の意識の違いについて—. 長野赤十字病院医誌 16, 113-116.
- 6) 清水真由美, 高橋令子, 平山敦子 (2006). 入院患者満足度調査を指標とした接遇向上への取り組み. 第 37 回日本看護学会論文集看護総合. 260-262.
- 7) 山田眞佐美, 米谷陽子, 久保恵子, 青木厚子, 佐藤眞一, 田久浩志 (2008). 一般市民から見た看護師への茶髪許容度. 第 39 回日本看護学会論文集看護総合. 230-232.
- 8) 高橋まゆ子, 岩城吉子, 池田京子, 栃山ひろ子, 安原陽子, 渡辺富美子, 上野栄一 (2006). 外来患者が好感を持った看護師の言動に関する質的分析. 第 37 回日本看護学会論文集地域看護. 252-254.
- 9) 前掲書 3)
- 10) 前掲書 7)
- 11) 前掲書 3)
- 12) 石田かおり (2009). 化粧と人間—規格化された身体からの脱出. 法政大学出版局. 18.
- 13) 前掲書 12) 25.
- 14) 前掲書 12) 31.

## Evaluation of nurses' make-up by university students from a standpoint of patients

AYAKO OGI\*, MATUMI TAMATANI\*\*, KANNA OKAYAMA\*

*\*Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja-shi, Okayama 719-1197, Japan*

*\*\*Kurashiki Central Hospital, 1-1-1, Miwa, Kurashiki-shi, Okayama 710-8602, Japan*

**Keywords** : nurses' make-up, evaluation, university students, impression, a stand point of patients